

## 授業計画(シラバス)

科目名	医学総論		指導担当者名	吾妻 真帆	
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり			実務経験: 有	
開講時期	前期	対象学科学年	言語聴覚士科1年		
授業方法	講義:○	演習:	実習:	実技:	
単位数	1単位	週時間数	2時間		
学習到達目標	日本の医療現場の現状を見極め、現代医療の本質を認識する。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験と調べ学習(レポート作成・提出)を総合して行う。 評価は、学習到達目標や内容に照らし次の4段階とする。 ・特に高い程度に達成しているもの…A、・高い程度に達成しているもの…B、・おおむね達成しているもの…C ・達成が不十分なもの…D(不合格)				
使用教材	配布プリント				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目	内容・準備資料等		
授業計画 前期	1	医学とは? 医学の歴史	概論		
	2	医療に従事する人々	職種、チーム医療		
	3	医療体制	医療施設		
	4	健康とは?	生活習慣病		
	5	リハビリテーション	障害者施設		
	6	高齢者ケア	少子高齢化社会と医療		
	7	今日の病院事情	救急医療、ホスピス等		
	8	近代医学の発達	感染症・医療サービス等		
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。</li> <li>・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。</li> </ul>					

## 授業計画(シラバス)

科目名	精神医学	指導担当者名	吉田 寿晃
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり		実務経験: 有
開講時期	後期	対象学科学年	言語聴覚士科2年
授業方法	講義:○	演習:	実習: 実技:
単位数	2単位	週時間数	2時間
学習到達目標	精神医学の基本的な知識を習得する。		
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行う。 定期試験は100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)		
使用教材	言語聴覚士テキスト第3版、配布プリント		
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。		
学期	ターム	項目	内容・準備資料等
授業計画 後期	1	概要	精神医学総論
	2	内因性精神疾患(統合失調症)	概要・症状・治療
	3	内因性精神疾患(統合失調症)	概要・症状・治療
	4	内因性精神疾患(気分障害)	概要・症状・治療
	5	内因性精神疾患(気分障害)	概要・症状・治療
	6	心因性精神疾患(神経症と心身症)	概要・症状・治療
	7	心因性精神疾患(不安障害)	概要・症状・治療
	8	心因性精神疾患(パニック障害)	概要・症状・治療
	9	心因性精神疾患(解離性・転換性障害)	概要・症状・治療
	10	心因性精神疾患(PTSD)	概要・症状・治療
	11	心因性精神疾患(摂食障害)	概要・症状・治療
	12	器質性精神疾患(認知症)	概要・症状・治療
	13	器質性精神疾患(中毒)	概要・症状・治療
	14	精神保健	
	15	入院形態、まとめ	
	16		
履修上の留意点			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。</li> <li>・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。</li> </ul>			

## 授業計画(シラバス)

科目名	耳鼻咽喉科学	指導担当者名	寺内 義貴
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり		実務経験: 有
開講時期	前期	対象学科学年	言語聴覚士科2年
授業方法	講義:○	演習:	実習: 実技:
単位数	2単位	週時間数	2時間
学習到達目標	耳鼻咽喉科学領域の基礎知識の理解を深める 言語聴覚士になる上で知っておくべき耳鼻咽喉科との関係		
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行う。 定期試験は100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)		
使用教材	病気がみえるvol.13 耳鼻咽喉科(MEDIC MEDIA)		
授業外学習 の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。		
<b>学期</b>	<b>ターム</b>	<b>項目</b>	<b>内容・準備資料等</b>
授業計画 前期	1	耳科学	解剖・生理・検査
	2	耳科学	外耳の疾患・中耳の疾患
	3	耳科学	中耳の疾患
	4	耳科学	中耳の疾患
	5	耳科学	内耳の疾患
	6	耳科学	内耳の疾患
	7	耳科学	平衡機能について
	8	鼻科学	解剖・生理・検査
	9	鼻科学	鼻の疾患
	10	鼻科学	鼻の疾患
	11	口腔・咽頭科学	解剖・生理・検査
	12	口腔・咽頭科学	口腔の疾患
	13	口腔・咽頭科学	咽頭の疾患
	14	食道科学	食道の疾患
	15	まとめ	
	16		
履修上の留意点			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。</li> <li>・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。</li> </ul>			

## 授業計画(シラバス)

科目名	聴覚系の構造・機能・病態	指導担当者名	寺内 義貴
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり		実務経験: 有
開講時期	前期	対象学科学年	言語聴覚士科1年
授業方法	講義:○	演習:	実習: 実技:
単位数	2単位	週時間数	2時間
学習到達目標	聴覚器の構造と機能を学び、聴覚についての知識を深める。また、聴覚障害とその原因についてそれぞれの特徴や違いを理解する。		
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験とレポートにより行う。 評価は、学習到達目標や内容に照らし次の4段階とする。 ・特に高い程度に達成しているもの…A, ・高い程度に達成しているもの…B, ・おおむね達成しているもの…C ・達成が不十分なもの…D(不合格)		
使用教材	病気がみえる耳鼻咽喉科(株式会社メディックメディア)		
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。		
学期	ターム	項目	内容・準備資料等
授業計画 前期	1	ガイダンス	授業の概要
	2	構造(1)	外耳・中耳・内耳の全体像
	3	構造(2)	耳の概観(1)
	4	構造(3)	耳の概観(2)
	5	構造(4)	聴器の部位・名称
	6	機能(1)	伝音系・外耳道
	7	機能(2)	中耳の機能
	8	機能(3)	中耳伝音機構
	9	機能(4)	内耳のしくみ 聴覚伝導路
	10	病態(1)	難聴の原因
	11	病態(2)	伝音難聴
	12	病態(3)	感音難聴
	13	病態(4)	後迷路性難聴
	14	まとめ	聴覚系まとめ
	15	復習	
	16		
履修上の留意点			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。</li> <li>・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。</li> </ul>			

## 授業計画(シラバス)

科目名	学習心理学		指導担当者名	吉田 寿晃
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり			実務経験: 有
開講時期	前期	対象学科学年	言語聴覚士科1年	
授業方法	講義:○	演習:	実習:	実技:
単位数	2単位	週時間数	2時間	
学習到達目標	学習心理学は心理学のもっとも基礎的な領域である。今日の心理学の基礎が学習心理学の研究によって築き上げられていたといっても過言ではない。この授業では心理学の基礎を理解するとともに、学習心理学の領域で明らかにされてきた様々な学習の仕組みを正しく理解することが求められる。			
評価方法 評価基準	<p>学習評価は、定期試験にて行う。          定期試験は100点法で評点する。          100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。          ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C          ・59～0点…D(不合格)          ただし、授業への積極的な参加や取り組みに対して加点、参加態度が良好でない場合に減点する場合がある。</p>			
使用教材	言語聴覚士のための心理学 第2版(医歯薬出版)			
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。			
学期	ターム	項目	内容・準備資料等	
授業計画 前期	1	心理学のプロフィール	ガイダンス	
	2	単純な学習1	順化と鋭敏化	
	3	単純な学習2	初期学習	
	4	古典的条件付け1	パブロフの研究と古典的条件付け	
	5	古典的条件付け2	古典的条件付けにおける般化と分化	
	6	古典的条件付け3	古典的条件付けの枠組みと評価	
	7	オペラント条件付け1	ソーンダイクの研究	
	8	オペラント条件付け2	オペラント条件付けの枠組みと評価	
	9	オペラント条件付け3	オペラント条件付けの枠組みと評価	
	10	条件付けの応用	条件付けの応用	
	11	記憶の総論1	記憶の過程	
	12	記憶の総論2	記憶の過程構造	
	13	記憶の各論1	感覚記憶と短期記憶	
	14	記憶の各論2	長期記憶	
	15	まとめ	まとめ	
	16			
履修上の留意点				
<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。</li> <li>・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。</li> </ul>				

## 授業計画(シラバス)

科目名	音響学	指導担当者名	寺内 義貴
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり		実務経験: 有
開講時期	後期	対象学科学年	言語聴覚士科2年
授業方法	講義:○	演習:	実習: 実技:
単位数	2単位	週時間数	2時間
学習到達目標	言語聴覚士として必要な音の物理的な性質と、日本語音声の生成・分析の知識を習得する。		
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験とレポートにより行う。 評定は、学習到達目標や内容に照らし次の4段階とする。 ・特に高い程度に達成しているもの…A、 ・高い程度に達成しているもの…B、 ・おおむね達成しているもの…C ・達成が不十分なもの…D(不合格)		
使用教材	言語聴覚士の音響学入門(海文堂書店)		
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。		
学期	ターム	項目	内容・準備資料等
授業計画 後期	1	音入門(1)	周波数、周期、振幅、波長、音速
	2	音入門(2)	周波数、周期、波長、音速の計算
	3	音のスペクトル	音の種類、純音と複合音、スペクトル
	4	デシベル(1)	単位、指数と対数
	5	デシベル(2)	デシベルの定義、計算演習
	6	音圧レベル	音圧レベルの定義、音圧レベルの計算
	7	音圧レベルと音の強さレベル	音圧と音の強さ dB SPLとdB IL
	8	音の物理的性質	屈折、反射、吸音、干渉、うなり、ドップラー効果
	9	総合演習	周波数、周期、波長、音速、音圧レベル
	10	聴力レベルと感覚レベル	聴力レベルと感覚レベルの定義および音圧レベルとの関係
	11	音源フィルター理論(1)	閉管の共鳴、声道の共鳴とホルマント
	12	音源フィルター理論(2)	母音の生成と各母音の特徴
	13	音のデジタル化	標本化と量子化
	14	スペクトログラム	スペクトログラムの作成、スペクトログラムにみる母音と子音の特徴
	15	プレテスト	プレテスト
	16		
履修上の留意点			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。</li> <li>・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。</li> </ul>			

## 授業計画(シラバス)

科目名	言語発達学		指導担当者名	金見 美奈子
実務経験	小児療育施設および介護老人保健施設での言語聴覚士業務従事経験あり			実務経験: 有
開講時期	前期	対象学科学年	言語聴覚士科1年	
授業方法	講義:○	演習:	実習:	実技:
単位数	2単位	週時間数	2時間	
学習到達目標	言語発達療法の基礎となることばの発達について学ぶ 正常なことばの発達過程について理解する			
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行う。 定期試験は100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)			
使用教材	言語聴覚障害総論Ⅱ 建帛社			
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。			
学期	ターム	項目	内容・準備資料等	
授業計画 前期	1	ことばの発達	STにとってのことばの発達	
	2	ことばの発達	言葉の発達の特徴	
	3	ことばの発達段階	前言語期(喃語・指さし)	
	4	ことばの発達段階	前言語期(三項関係・象徴機能)	
	5	ことばの発達段階	前言語期(音韻知覚・母子相互作用)	
	6	ことばの発達段階	1～2歳児の言語(初語・過大般用)	
	7	ことばの発達段階	1～2歳児の言語(幼児語・爆発期・第一質問期)	
	8	ことばの発達段階	1～2歳児の言語(CDS・一語発話・2語文)	
	9	ことばの発達段階	幼児期の言語	
	10	ことばの発達段階	幼児期の言語	
	11	ことばの発達段階	児童期の言語	
	12	ことばの発達段階	老年期の言語	
	13	発達理論	言語獲得理論	
	14	まとめ		
	15	ペーパーテスト		
	16			
履修上の留意点				
<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。</li> <li>・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。</li> </ul>				

## 授業計画(シラバス)

科目名	言語聴覚障害診断学 I		指導担当者名	金見 美奈子, 吉田 寿晃	
実務経験	小児療育施設および介護老人保健施設での言語聴覚士業務従事経験あり(金見) 医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり(吉田)			実務経験:	有
開講時期	前期	対象学科学年	言語聴覚士科2年		
授業方法	講義:○	演習:	実習:	実技:	
単位数	4単位	週時間数	2時間		
学習到達目標	小児分野・急性期における言語聴覚障害の評価・診断の方法を学び、演習を行う。 言語聴覚障害の診断に必要な知識を確認する。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行う。 定期試験は100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	配布資料、各種専門科目教科書				
授業外学習 の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目	内容・準備資料等		
授業 計画 前期	1	言語発達障害とは	言語発達障害の原因と状態		
	2	言語発達障害の評価診断①	言語聴覚士の役割・問診のポイントを学ぶ		
	3	言語発達障害の評価診断②	評価の目的と方法を学ぶ①		
	4	言語発達障害の評価診断③	訓練プログラム立案の方法を学ぶ		
	5	言語発達障害の評価診断④	知的障害の評価、指導方法を学ぶ①		
	6	言語発達障害の評価診断⑤	知的障害の評価、指導方法を学ぶ②		
	7	言語発達障害の評価診断⑥	特異的言語発達遅滞の評価、指導方法を学ぶ①		
	8	言語発達障害の評価診断⑦	特異的言語発達遅滞の評価、指導方法を学ぶ①		
	9	言語発達障害の評価診断⑧	ASDの評価、指導方法を学ぶ①		
	10	言語発達障害の評価診断⑨	ASDの評価、指導方法を学ぶ①		
	11	言語発達障害の評価診断⑩	LDの評価、指導方法を学ぶ①		
	12	言語発達障害の評価診断⑪	LDの評価、指導方法を学ぶ①		
	13	言語発達障害の評価診断⑫	CPの評価、指導方法を学ぶ①		
	14	言語発達障害の評価診断⑬	症例報告書を作成する		
	15	講義まとめ	講義の内容のまとめを行う		
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。</li> <li>・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。</li> </ul>					

## 授業計画(シラバス)

科目名	言語聴覚障害診断学 I		指導担当者名	金見 美奈子, 吉田 寿晃	
実務経験	小児療育施設および介護老人保健施設での言語聴覚士業務従事経験あり(金見) 医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり(吉田)			実務経験:	有
開講時期	後期	対象学科学年	言語聴覚士科2年		
授業方法	講義:○	演習:	実習:	実技:	
単位数	4単位	週時間数	2時間		
学習到達目標	小児分野・急性期における言語聴覚障害の評価・診断の方法を学び、演習を行う。 言語聴覚障害の診断に必要な知識を確認する。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行う。 定期試験は100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	配布資料、各種専門科目教科書				
授業外学習 の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目	内容・準備資料等		
授業計画 後期	16	急性期の評価・診断①	急性期の言語聴覚士の役割		
	17	急性期の評価・診断②	急性期の評価の流れ		
	18	急性期の評価・診断③	急性期の検査		
	19	急性期の評価・診断④	急性期の検査実習		
	20	急性期の評価・診断⑤	急性期の検査結果の分析と考察		
	21	急性期の評価・診断⑥	問題点・目標設定		
	22	急性期の評価・診断⑦	急性期におけるアプローチ方法		
	23	急性期の評価・診断⑧	急性期の症例検討①		
	24	急性期の評価・診断⑨	急性期の症例検討②		
	25	急性期の評価・診断⑩	急性期の症例検討③		
	26	急性期の評価・診断⑪	急性期の症例検討④		
	27	急性期の評価・診断⑫	急性期の症例検討⑤		
	28	急性期の評価・診断⑬	急性期の症例検討⑥		
	29	急性期の評価・診断⑭	報告書の書き方		
	30	急性期の評価・診断⑮	まとめ		
31					
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。</li> <li>・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。</li> </ul>					

## 授業計画(シラバス)

科目名	言語聴覚障害診断学Ⅱ		指導担当者名	吾妻 真帆	
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり			実務経験:	有
開講時期	後期		対象学科学年	言語聴覚士科2年	
授業方法	講義:○	演習:	実習:	実技:	
単位数	4単位		週時間数	4時間	
学習到達目標	回復期・維持期分野における言語聴覚障害の評価・診断の方法を学び、演習を行う。 言語聴覚障害の診断に必要な知識を確認する。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行う。 定期試験は100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	配布資料、各種専門科目教科書				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目	内容・準備資料等		
授業計画 後期	1	回復期の評価・診断①	回復期の言語聴覚士の役割		
	2	回復期の評価・診断②	回復期の評価の流れ		
	3	回復期の評価・診断③	回復期の検査		
	4	回復期の評価・診断④	回復期の検査実習		
	5	回復期の評価・診断⑤	回復期の検査結果の分析と考察		
	6	回復期の評価・診断⑥	問題点・目標設定		
	7	回復期の評価・診断⑦	訓練プログラム立案		
	8	回復期の評価・診断⑧	回復期の症例検討①		
	9	回復期の評価・診断⑨	回復期の症例検討②		
	10	回復期の評価・診断⑩	回復期の症例検討③		
	11	回復期の評価・診断⑪	回復期の症例検討④		
	12	回復期の評価・診断⑫	回復期の症例検討⑤		
	13	回復期の評価・診断⑬	回復期の症例検討⑥		
	14	回復期の評価・診断⑭	報告書の書き方		
	15	回復期の評価・診断⑮	まとめ		
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。</li> <li>・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。</li> </ul>					

## 授業計画(シラバス)

科目名	言語聴覚障害診断学Ⅱ		指導担当者名	吾妻 真帆	
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり			実務経験:	有
開講時期	後期		対象学科学年	言語聴覚士科2年	
授業方法	講義:○	演習:	実習:	実技:	
単位数	4単位		週時間数	4時間	
学習到達目標	回復期・維持期分野における言語聴覚障害の評価・診断の方法を学び、演習を行う。 言語聴覚障害の診断に必要な知識を確認する。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行う。 定期試験は100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	配布資料、各種専門科目教科書				
授業外学習 の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目	内容・準備資料等		
授業 計画  後 期	16	維持期の評価・診断①	維持期の言語聴覚士の役割		
	17	維持期の評価・診断②	維持期の評価の流れ		
	18	維持期の評価・診断③	維持期の検査		
	19	維持期の評価・診断④	維持期の検査実習		
	20	維持期の評価・診断⑤	維持期の検査結果の分析と考察		
	21	維持期の評価・診断⑥	問題点・目標設定		
	22	維持期の評価・診断⑦	訓練プログラム立案		
	23	維持期の評価・診断⑧	維持期の症例検討①		
	24	維持期の評価・診断⑨	維持期の症例検討②		
	25	維持期の評価・診断⑩	維持期の症例検討③		
	26	維持期の評価・診断⑪	維持期の症例検討④		
	27	維持期の評価・診断⑫	維持期の症例検討⑤		
	28	維持期の評価・診断⑬	維持期の症例検討⑥		
	29	維持期の評価・診断⑭	報告書の書き方		
	30	維持期の評価・診断⑮	まとめ		
31					
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。</li> <li>・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。</li> </ul>					

## 授業計画(シラバス)

科目名	失語症 I		指導担当者名	吾妻 真帆
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり			実務経験: 有
開講時期	後期	対象学科学年	言語聴覚士科1年	
授業方法	講義:○	演習:	実習:	実技:
単位数	2単位	週時間数	2時間	
学習到達目標	失語症の定義、原因、病態、研究の歴史について理解できる。 失語症のタイプ分類と特色について理解できる。			
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験と授業で行う小試験を総合する。 評価は100点法で評価する。 100点法による評価は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)			
使用教材	標準言語聴覚障害学 失語症学 (医学書院)			
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。			
学期	ターム	項目	内容・準備資料等	
授業計画 後期	1	失語症について	失語症について(事例、映像使用)DVD(立石先生)	
	2	失語症の定義	グループ学習課題	
	3	失語症の原因	発表会(1)	
	4	失語症の原因、脳卒中について	発表会(2)	
	5	失語症研究の歴史 脳と神経ネットワーク	失語症研究の歴史、脳部位、神経ネットワーク センとくんPPT	
	6	失語症研究～古典論について ウェルニッケリヒトハイムの図について	ウェルニッケリヒトハイム(プリント)	
	7	小テスト タイプ分類の考え方について・ブローカ失語	小テストA ブローカ失語の特徴	
	8	ブローカ失語(2)	ブローカ失語の特徴	
	9	ウェルニッケ失語(1)	ウェルニッケ失語の特徴	
	10	ウェルニッケ失語(2)、伝導失語	ウェルニッケ失語の特徴、伝導失語の特徴	
	11	失名詞失語 TCMA、TCSA	失名詞失語、TCMA、TCSAの特徴	
	12	MTCA、語義失語	MTCA、語義失語の特徴	
	13	全失語、交叉性失語、皮質下性失語の病態	全失語、交叉性失語、皮質下性失語の特徴	
	14	純粋型、発語失行など	純粋型、発語失行の特徴、総まとめ テスト範囲呈示	
	15	まとめ		
	16			
履修上の留意点				
<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。</li> <li>・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。</li> </ul>				

## 授業計画(シラバス)

科目名	失語症Ⅱ		指導担当者名	吉田 寿晃, 吾妻 真帆
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり			実務経験: 有
開講時期	前期	対象学科学年	言語聴覚士科2年	
授業方法	講義:○	演習:	実習:	実技:
単位数	4単位	週時間数	2時間	
学習到達目標	失語症の基礎的事項の知識を深めるとともに、臨床知識を学び評価・訓練へと繋げる。			
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行う。 定期試験は100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)			
使用教材	標準言語聴覚障害学 失語症学 (医学書院)			
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。			
学期	ターム	項目	内容・準備資料等	
授業計画 前期	1	失語症状・関連症状振り返り	失語症Ⅰの学習内容の振り返り	
	2	各期臨床の流れ①	急性期臨床について	
	3	各期臨床の流れ②	回復期・維持期臨床について	
	4	初回面接時の情報収集 関連職種からの情報収集	評価時の情報収集について	
	5	失語症訓練技法①	刺激法・遮断除去法	
	6	失語症訓練技法②	機能再編成法、行動変容法、PACE	
	7	失語症訓練技法③	認知神経心理学的アプローチ	
	8	標準失語症検査①	SLTAの目的、特徴の解説 『話す』の下位項目練習	
	9	芳醇失語症検査②	『聞く』、『読む』の下位項目練習	
	10	標準失語症検査③	『書く』、『計算』の下位項目練習	
	11	具体例からの各モダリティの障害①	喚語、統語、聴覚的理解	
	12	具体例からの各モダリティの障害②	復唱、読み、書字、計算機能の障害	
	13	WAB失語症検査①	WAB失語症検査の特徴・内容の解説、自発話	
	14	WAB失語症検査②	話し言葉の理解・復唱・呼称	
	15	WAB失語症検査③	読み・書字・行為・構成・視空間行為・計算	
	16			
履修上の留意点				
<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。</li> <li>・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。</li> </ul>				

## 授業計画(シラバス)

科目名	失語症Ⅱ		指導担当者名	吉田 寿晃, 吾妻 真帆	
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり			実務経験:	有
開講時期	後期	対象学科学年	言語聴覚士科2年		
授業方法	講義:○	演習:	実習:	実技:	
単位数	4単位	週時間数	2時間		
学習到達目標	失語症の基礎的事項の知識を深めるとともに、臨床知識を学び評価・訓練へと繋げる。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行う。 定期試験は100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	標準言語聴覚障害学 失語症学 (医学書院)				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
<b>学期</b>	<b>ターム</b>	<b>項目</b>	<b>内容・準備資料等</b>		
授業計画 後期	16	重度失語症検査①	重度失語症検査の特徴・内容の解説、導入部・PART I 演習		
	17	重度失語症検査②	PART II・PART III 演習		
	18	失語症鑑別診断検査①	失語症鑑別診断検査の特徴・内容の説明、聞く過程・読む過程		
	19	失語症鑑別診断検査②	話す過程・書く過程・数と計算		
	20	掘り下げ検査について	ディープテストの種類、概要		
	21	標準失語症検査補助テスト①	SLTA-STの特徴・内容の説明、発声発語器官および構音の検査		
	22	標準失語症検査補助テスト②	yes-no応答、金額および時間の計算、まんがの説明、長文の理解、呼称		
	23	失語症語彙検査①	失語症語彙検査の特徴・内容の説明、語彙判断検査		
	24	失語症語彙検査②	名詞・動詞検査、類義語判断検査、意味カテゴリ別名詞検査		
	25	SALA失語症検査①	SALA失語症検査の特徴・内容の説明、演習①		
	26	SALA失語症検査②	演習②		
	27	実際の失語症状①	会話場面からの評価		
	28	実際の失語症状②	呼称・復唱からの評価		
	29	実際の失語症状③	失語症状の長期的経過		
30	実際の失語症状④	まとめ			
31					
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。</li> <li>・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。</li> </ul>					

## 授業計画(シラバス)

科目名	失語症Ⅲ		指導担当者名	寺内 義貴
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり			実務経験: 有
開講時期	後期	対象学科学年	言語聴覚士科2年	
授業方法	講義:○	演習:	実習:	実技:
単位数	2単位	週時間数	2時間	
学習到達目標	失語症に関わる言語処理、掘り下げ検査などについて学び、確認することで体得できる。 失語症の評価・訓練について考察・検討することができる。			
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験とレポートを総合して行う。 評定は、学習到達目標や内容に照らし次の4段階とする。 ・特に高い程度に達成しているもの…A, ・高い程度に達成しているもの…B, ・おおむね達成しているもの…C ・達成が不十分なもの…D(不合格)			
使用教材	標準言語聴覚障害学 失語症学(医学書院)			
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。			
学期	ターム	項目	内容・準備資料等	
授業計画 後期	1	検査、評価、訓練、援助について スクリーニング検査について	言語聴覚療法の流れ スクリーニング検査作成	
	2	総合検査について SLTA	総合検査について SLTAに触ってみる	
	3	SLTA 全体の流れ SLTA・演習	SLTA(1) 概要	
	4	SLTA解説・演習	SLTA(2) 1～3	
	5	SLTA解説・演習	SLTA(3) 4～7	
	6	SLTA解説・演習	SLTA(4) 8～10	
	7	SLTA解説・演習	SLTA(5) 11～17	
	8	SLTA解説・演習	SLTA(6) 18～21	
	9	SLTA解説・演習	SLTA(7) 22～26、プロフィールについて	
	10	SLTAのプロフィールの書き方	症例のプロフィールA・B・Cを書いてみる	
	11	プロフィールの書き方 解説	症例をもちいて 解説 SLTAの解釈の仕方	
	12	SLTA-ST(1)	検査内容確認、説明、演習	
	13	SLTA-ST(2)	検査内容確認、説明、演習	
	14	WAB(1)	検査内容確認、説明、演習	
	15	WAB(2)	検査内容確認、説明、演習	
	16			
履修上の留意点				
<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。</li> <li>・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。</li> </ul>				

## 授業計画(シラバス)

科目名	言語発達障害総論 I		指導担当者名	金見 美奈子
実務経験	小児療育施設および介護老人保健施設での言語聴覚士業務従事経験あり			実務経験: 有
開講時期	後期	対象学科学年	言語聴覚士科1年	
授業方法	講義:○	演習:	実習:	実技:
単位数	2単位	週時間数	2時間	
学習到達目標	言語発達障害を引き起こす疾患・原因等の大枠を理解する			
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行う。 定期試験は100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)			
使用教材	言語聴覚士のための言語発達障害学 医歯薬出版			
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。			
学期	ターム	項目	内容・準備資料等	
授業計画 後期	1	発達障害とは①	発達障害とは何か。DSM-IV-TRについて	
	2	発達障害とは②	発達障害に気付かれる時期 軽度発達障害について	
	3	知的障害とは①	知的活動について、知的障害について	
	4	知的障害とは②	ダウン症について、IQについて	
	5	知的障害とは③	ダウン症のめざめ	
	6	広汎性発達障害とは①	症例、異常感覚について	
	7	広汎性発達障害とは②	DSM-IV-TR 各疾患について	
	8	広汎性発達障害とは③	DSM-IV-TR 各疾患について	
	9	学習障害とは①	学習障害について	
	10	学習障害とは②	読み書き障害について	
	11	特異的言語発達遅滞とは①	特異的言語発達遅滞について	
	12	特異的言語発達遅滞とは②	特異的言語発達遅滞について	
	13	注意欠陥多動性障害とは	注意欠陥多動性障害のタイプについて	
	14	脳性麻痺、重複障害とは	脳性麻痺、重複障害について	
	15	まとめ		
	16			
履修上の留意点				
<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。</li> <li>・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。</li> </ul>				

## 授業計画(シラバス)

科目名	言語発達障害総論Ⅱ		指導担当者名	金見 美奈子
実務経験	小児療育施設および介護老人保健施設での言語聴覚士業務従事経験あり			実務経験： 有
開講時期	前期	対象学科学年	言語聴覚士科2年	
授業方法	講義：	演習：○	実習：	実技：
単位数	2単位	週時間数	2時間	
学習到達目標	小児の評価に必要な検査の実施方法、結果の解釈を学ぶ			
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験と実技試験を総合して行う。 評定は、学習到達目標や内容に照らし次の4段階とする。 ・特に高い程度に達成しているもの…A、 ・高い程度に達成しているもの…B、 ・おおむね達成しているもの…C ・達成が不十分なもの…D(不合格)			
使用教材	言語聴覚士のための言語発達障害学 医歯薬出版			
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。			
学期	ターム	項目	内容・準備資料等	
授業計画 前期	1	国リハ式S-S法言語発達遅滞検査①	言語発達遅滞検査の概要	
	2	国リハ式S-S法言語発達遅滞検査②	検査の実施手続き 注意点	
	3	国リハ式S-S法言語発達遅滞検査③	記号形式—指示内容関係①	
	4	国リハ式S-S法言語発達遅滞検査④	記号形式—指示内容関係②	
	5	国リハ式S-S法言語発達遅滞検査⑤	記号形式—指示内容関係③	
	6	国リハ式S-S法言語発達遅滞検査⑥	基礎的プロセス	
	7	国リハ式S-S法言語発達遅滞検査⑦	コミュニケーション態度	
	8	国リハ式S-S法言語発達遅滞検査⑧	質問紙	
	9	国リハ式S-S法言語発達遅滞検査⑨	症状分類	
	10	国リハ式S-S法言語発達遅滞検査⑩	症状分類	
	11	PVT-R①	PVT-Rの実際と結果の解釈	
	12	PVT-R②	PVT-Rの実際と結果の解釈	
	13	質問応答関係検査①	質問応答検査の実際と結果の解釈	
	14	質問応答関係検査②	質問応答検査の実際と結果の解釈	
	15	質問応答関係検査③	質問応答検査の実際と結果の解釈	
履修上の留意点				
<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。</li> <li>・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。</li> </ul>				

## 授業計画(シラバス)

科目名	言語発達障害総論Ⅱ		指導担当者名	金見 美奈子
実務経験	小児療育施設および介護老人保健施設での言語聴覚士業務従事経験あり			実務経験: 有
開講時期	後期	対象学科学年	言語聴覚士科2年	
授業方法	講義:	演習:○	実習:	実技:
単位数	2単位	週時間数	2時間	
学習到達目標	小児の評価に必要な検査の実施方法、結果の解釈を学ぶ			
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験と実技試験を総合して行う。 評定は、学習到達目標や内容に照らし次の4段階とする。 ・特に高い程度に達成しているもの…A, ・高い程度に達成しているもの…B, ・おおむね達成しているもの…C ・達成が不十分なもの…D(不合格)			
使用教材	言語聴覚士のための言語発達障害学 医歯薬出版			
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。			
学期	ターム	項目	内容・準備資料等	
授業計画 後期	16	遠城寺式乳幼児分析的発達検査①	検査の実際と結果の解釈	
	17	遠城寺式乳幼児分析的発達検査②	検査の実際と結果の解釈	
	18	津守式乳幼児発達検査	検査の実際と結果の解釈	
	19	新版K式発達検査①	検査の実際	
	20	新版K式発達検査②	検査の実際	
	21	新版K式発達検査③	検査の実際	
	22	新版K式発達検査④	結果の解釈	
	23	新版K式発達検査⑤	結果の解釈	
	24	インリアルアプローチ	基本理念と実際	
	25	ポーターズプログラム	ポーターズプログラムの概要と解釈	
	26	WISC-Ⅳ①	検査概要	
	27	WISC-Ⅳ②	検査の実際と結果の解釈	
	28	WISC-Ⅳ③	検査の実際と結果の解釈	
	29	WISC-Ⅳ④	検査の実際と結果の解釈	
	30	総まとめ		
31				
履修上の留意点				
<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。</li> <li>・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。</li> </ul>				

## 授業計画(シラバス)

科目名	言語発達障害Ⅱ	指導担当者名	金見 美奈子
実務経験	小児療育施設および介護老人保健施設での言語聴覚士業務従事経験あり		実務経験： 有
開講時期	後期	対象学科学年	言語聴覚士科2年
授業方法	講義：○	演習：	実習： 実技：
単位数	2単位	週時間数	2時間
学習到達目標	脳性麻痺の概要(基礎知識)、治療・療育について		
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験とレポートにより行う。 評定は、学習到達目標や内容に照らし次の4段階とする。 ・特に高い程度に達成しているもの…A、 ・高い程度に達成しているもの…B、 ・おおむね達成しているもの…C ・達成が不十分なもの…D(不合格)		
使用教材	改訂 言語発達障害Ⅲ 建帛社		
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。		
<b>学期</b>	<b>ターム</b>	<b>項目</b>	<b>内容・準備資料等</b>
授業計画 後期	1	定義・ガイダンス	CPの定義・分類
	2	運動特徴	CPの運動特徴と正常な運動発達
	3	基礎知識	原因・診断
	4	合併症	知的障害・てんかん・感覚障害など
	5	中間評価	CPの知識
	6	合併症状	合併症状と言語聴覚障害
	7	CPの言語発達	言語面の特徴
	8	情報収集	情報収集の仕方 項目
	9	評価①	臨床的評価と客観的評価
	10	評価②	脳性麻痺の評価1
	11	評価③	嚥下機能の評価
	12	評価④	脳性麻痺の評価2
	13	評価⑤	脳性麻痺の評価3
	14	訓練	訓練について
	15	まとめ	まとめ
	16		
履修上の留意点			
・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。			

## 授業計画(シラバス)

科目名	言語発達障害Ⅲ		指導担当者名	金見 美奈子
実務経験	小児療育施設および介護老人保健施設での言語聴覚士業務従事経験あり			実務経験： 有
開講時期	後期	対象学科学年	言語聴覚士科2年	
授業方法	講義：○	演習：	実習：	実技：
単位数	2単位	週時間数	2時間	
学習到達目標	言語の各側面、各障害について知り、特性に合わせたプログラムの考え方を学ぶ。			
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行う。 定期試験は100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)			
使用教材	言語障害療法シリーズ14 改訂 言語発達障害学Ⅲ(建帛社)			
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。			
<b>学期</b>	<b>ターム</b>	<b>項目</b>	<b>内容・準備資料等</b>	
授業計画 後期	1	発達障害	発達障害の確認、発達障害の捉え方	
	2	発達障害者支援法	発達障害者支援法の概要と軽度発達障害について	
	3	発達障害を捉える枠組み	阻害要因、コミュニケーション障害	
	4	発達障害を捉える枠組み	処理過程・サブタイプ	
	5	TEACCHプログラム	問題行動に対する対策	
	6	症例検討	自閉症のコミュニケーション指導	
	7	症例検討	LD 文字学習について	
	8	症例検討	LD 文字学習について	
	9	AACについて	STに求められる専門性	
	10	AACについて	ローテク・ノンテクコミュニケーション	
	11	AACについて	ハイテクコミュニケーション	
	12	AACについて	コミュニケーションボードの指導について	
	13	症例検討	AACについて	
	14	症例検討	ADHD	
	15	まとめ		
	16			
履修上の留意点				
・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。				

## 授業計画(シラバス)

科目名	音声障害	指導担当者名	寺内 義貴
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり		実務経験: 有
開講時期	前期	対象学科学年	言語聴覚士科2年
授業方法	講義:○	演習:	実習: 実技:
単位数	2単位	週時間数	4時間
学習到達目標	発声・発語の構造・機能の基礎知識の再確認と音声障害の評価・診断・治療の概要を理解する。		
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験とレポートにより行う。 評定は、学習到達目標や内容に照らし次の4段階とする。 ・特に高い程度に達成しているもの…A、 ・高い程度に達成しているもの…B、 ・おおむね達成しているもの…C ・達成が不十分なもの…D(不合格)		
使用教材	言語聴覚療法シリーズ14 改訂 音声障害 (建帛社)		
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。		
<b>学期</b>	<b>ターム</b>	<b>項目</b>	<b>内容・準備資料等</b>
授業計画 前期	1	音声言語医学(1)	声の特徴とその調節
	2	音声言語医学(2)	声の使用と問題
	3	音声言語医学(3)	発声器官の仕組みとはたらき
	4	音声言語医学(4)	発声の生理
	5	音声言語医学(5)	発声の物理
	6	音声言語医学(6)	
	7	音声障害の診断と評価(1)	分類
	8	音声障害の診断と評価(2)	喉頭観察
	9	音声障害の診断と評価(3)	音声の評価・方法
	10	音声障害の治療(1)	原理
	11	音声障害の治療(2)	治療の実際
	12	音声障害の治療(3)	音声外科と薬物療法
	13	無喉頭音声(1)	代用音声のリハ
	14	無喉頭音声(2)	代用音声のリハ
	15	まとめ	
	16		
履修上の留意点			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。</li> <li>・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。</li> </ul>			

## 授業計画(シラバス)

科目名	運動障害性構音障害 I	指導担当者名	吾妻 真帆
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり		実務経験: 有
開講時期	前期	対象学科学年	言語聴覚士科2年
授業方法	講義:○	演習:	実習: 実技:
単位数	2単位	週時間数	2時間
学習到達目標	ディサースリアの概要・運動障害・発話特徴を理解する。 検査方法の手順を理解し、実施できる。 検査結果の解釈、問題点の抽出、訓練プログラムの立案ができる。		
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行う。 定期試験は100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)		
使用教材	ディサースリア臨床標準テキスト		
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。		
学期	ターム	項目	内容・準備資料等
授業計画 前期	1	授業概要	ディサースリアの定義、失語・発話失行との違い
	2	タイプ分類概要	特徴的な運動障害 発話特徴の名称と意味
	3	運動系とその障害	錐体路・下位ニューロン・錐体外路
	4	運動系とその障害	錐体路・下位ニューロン・錐体外路
	5	タイプ分類(1)	痙性ディサースリア・UUMNディサースリア
	6	タイプ分類(2)	弛緩性ディサースリア
	7	タイプ分類(3)	失調性ディサースリア
	8	タイプ分類(4)	運動低下性ディサースリア
	9	タイプ分類(5)	運動過多性ディサースリア
	10	タイプ分類(6)	混合性ディサースリア
	11	評価	評価の流れ
	12	評価	評価の流れ
	13	まとめ(1)	国試問題、解説
	14	まとめ(2)	国試問題、解説
	15	まとめ(3)	国試問題、解説
	16		
履修上の留意点			
・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。			

## 授業計画(シラバス)

科目名	吃音		指導担当者名	金見 美奈子
実務経験	小児療育施設および介護老人保健施設での言語聴覚士業務従事経験あり			実務経験: 有
開講時期	後期	対象学科学年	言語聴覚士科1年	
授業方法	講義:○	演習:	実習:	実技:
単位数	2単位	週時間数	2時間	
学習到達目標	吃音の基礎知識・検査・訓練について学ぶ			
評価方法 評価基準	<p>学習評価は、定期試験とレポートにより行う。                  評価は、学習到達目標や内容に照らし次の4段階とする。                  ・特に高い程度に達成しているもの…A、・高い程度に達成しているもの…B、・おおむね達成しているもの…C                  ・達成が不十分なもの…D(不合格)</p>			
使用教材	言語聴覚療法 臨床マニュアル			
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。			
学期	ターム	項目	内容・準備資料等	
授業計画 後期	1	吃音について	吃音者が抱える問題	
	2	吃音について	DSM-IV-TR、ICD-10定義 吃音についてのいくつかの知見	
	3	吃音症状	身体症状を含む吃音症状、進展段階	
	4	非流暢性	吃音以外の非流暢性、発達性・獲得性吃音	
	5	吃音と臨床の流れ	小児と成人のポイント	
	6	情報収集(1)	内容・聴取の仕方	
	7	情報収集(2)	幼児・学童・成人	
	8	発話特徴	吃音頻度・非流暢性頻度・発話速度	
	9	検査	課題検査について	
	10	環境調整	幼児期の特徴、環境調整	
	11	症例検討	環境調整の例	
	12	訓練(1)	遊戯療法について	
	13	訓練(2)	流暢促進訓練・吃音軽減訓練	
	14	訓練(3)	DAF	
	15	まとめ		
	16			
履修上の留意点				
<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。</li> <li>・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。</li> </ul>				

## 授業計画(シラバス)

科目名	嚥下障害 I	指導担当者名	吾妻 真帆
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり		実務経験: 有
開講時期	後期	対象学科学年	言語聴覚士科1年
授業方法	講義:○	演習:	実習: 実技:
単位数	2単位	週時間数	2時間
学習到達目標	摂食嚥下時に行われている運動を理解する。 摂食嚥下障害の障害像、およびそれに起因する困難を理解する。		
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行う。 定期試験は100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)		
使用教材	言語聴覚士のための摂食・嚥下障害学(医歯薬出版)		
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。		
学期	ターム	項目	内容・準備資料等
授業計画 後期	1	摂食嚥下とは	食べるということ
	2	摂食嚥下障害とは	摂食嚥下障害の概要
	3	摂食嚥下にかかわる器官①	口腔
	4	摂食嚥下にかかわる器官②	鼻腔・咽頭
	5	摂食嚥下にかかわる器官③	喉頭・食道
	6	摂食嚥下にかかわる筋	筋とその働きおよび支配神経
	7	嚥下モデル①	生理モデル・臨床モデル
	8	嚥下モデル②	先行期・準備期・口腔期
	9	嚥下モデル③	咽頭期・食道期
	10	発達と摂食嚥下障害	嚥下運動の獲得
	11	加齢と摂食嚥下障害	加齢に伴う生理的変化
	12	誤嚥	誤嚥の概要
	13	誤嚥の分類①	ログマンの分類
	14	誤嚥の分類②	その他の分類
	15	まとめ	
	16		
履修上の留意点			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。</li> <li>・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。</li> </ul>			

## 授業計画(シラバス)

科目名	嚥下障害Ⅱ		指導担当者名	吉田 寿晃
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり			実務経験: 有
開講時期	後期	対象学科学年	言語聴覚士科2年	
授業方法	講義:○	演習:	実習:	実技:
単位数	2単位	週時間数	2時間	
学習到達目標	1. 摂食嚥下障害の基礎知識について説明できる。 2. 摂食嚥下障害の評価法について説明し、評価法の基礎的な手技を実践できる。 3. 摂食嚥下障害の指導・訓練・治療法について、その基礎的な内容を説明でき、かつ評価結果から必要な方法を選択することができる。 4. 上記に関わらず、社会人としての適正な言語能力があること、対人関係を構築することができる。			
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行う。 定期試験は100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)			
使用教材	言語聴覚士のための摂食嚥下障害学(医歯薬出版)			
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。			
学期	ターム	項目	内容・準備資料等	
授業計画 後期	1	オリエンテーション、課題提示	配布資料(目標課題30項目)、教科書	
	2	課題の実施	配布資料、教科書、演習用動画データの配布	
	3	演習: 嚥下造影検査所見の読影・解析	・PC(1人1台)を使用する。事前に動画再生ソフトquicktime(無料版)をインストールし、前回配布の動画データを保存しておくこと。 ・解析シートの配布	
	4	演習: 嚥下造影検査所見の読影・解析	・PC(1人1台)を使用する。事前に動画再生ソフトquicktime(無料版)をインストールし、前回配布の動画データを保存しておくこと。 ・解析シートの配布	
	5	演習: 嚥下造影検査所見の読影・解析	・PC(1人1台)を使用する。事前に動画再生ソフトquicktime(無料版)をインストールし、前回配布の動画データを保存しておくこと。 ・解析シートの配布	
	6	演習: 嚥下造影検査所見の読影・解析	・PC(1人1台)を使用する。事前に動画再生ソフトquicktime(無料版)をインストールし、前回配布の動画データを保存しておくこと。 ・解析シートの配布	
	7	講義: 言語聴覚士が単独で行える嚥下の検査	配布資料、教科書	
	8	演習: 言語聴覚士が単独で行える嚥下の検査の演習	以下に学生1人あたりの数量を示す。飲料水(100cc程度)、舌圧子(1)、ペンライト(2人に1)、ティースプーン(1)、果実ゼリーまたはプリン(1)、聴診器(2人に1)、綿棒(綿球が小さく、柄の長いもの)(1)、ティスポ手袋(4)、シリンジ(10cc×1)、紙コップ(1)、パルスオキシメータ(あれば数台)、トロミ剤(1)	
	9	演習: 言語聴覚士が単独で行える嚥下の検査の演習	以下に学生1人あたりの数量を示す。飲料水(100cc程度)、舌圧子(1)、ペンライト(2人に1)、ティースプーン(1)、果実ゼリーまたはプリン(1)、聴診器(2人に1)、綿棒(綿球が小さく、柄の長いもの)(1)、ティスポ手袋(4)、シリンジ(10cc×1)、紙コップ(1)、パルスオキシメータ(あれば数台)、トロミ剤(1)	
	10	講義: 基礎訓練(間接訓練)法 摂食訓練(直接訓練)法、代償法	教科書	
	11	講義: 歯科補綴的対応、外科的治療、 代替栄養法	教科書	
	12	講義: 臨床上の留意点(リスク管理、気管切開、 口腔・咽頭の衛生など)	教科書	
	13	講義のまとめ	配布資料、教科書	
	14	質疑応答、補足的講義	配布資料、教科書	
	15	課題の最終作成、提出	配布資料、教科書	
	16			
履修上の留意点				
<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。</li> <li>・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。</li> </ul>				

## 授業計画(シラバス)

科目名	聴覚障害総論Ⅱ	指導担当者名	吉田 寿晃
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり		実務経験: 有
開講時期	後期	対象学科学年	言語聴覚士科2年
授業方法	講義:	演習:○	実習: 実技:
単位数	1単位	週時間数	2時間
学習到達目標	聴覚系の検査・評価の理論および手技を理解する。		
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行う。 定期試験は100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)		
使用教材	標準言語聴覚障害学 聴覚障害学 第3版(医学書院)、聴覚検査の実際 改訂第4版(南山堂)		
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。		
学期	ターム	項目	内容・準備資料等
授業計画 後期	1	評価の概要	
	2	検査①	検査の種類、純音聴力検査①
	3	検査②	純音聴力検査②
	4	検査③	純音聴力検査③
	5	検査④	自記オーディオメトリー①
	6	検査⑤	自記オーディオメトリー②
	7	検査⑥	語音聴力検査①
	8	検査⑦	語音聴力検査②
	9	小テスト	ペーパーテスト
	10	検査⑧	インピーダンスオーディオメトリー
	11	検査⑨	耳音響放射、聴性誘発反応
	12	検査⑩	乳幼児聴力検査①
	13	検査⑪	乳幼児聴力検査②、選別聴力検査①
	14	検査⑫	選別聴力検査②
	15	まとめ	
	16		
履修上の留意点			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。</li> <li>・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。</li> </ul>			